

---

## 大災害を乗り越えて

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.204-209)

2013年10月25日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

宮城県石巻市の石巻赤十字病院は、2013年3月11日の東北大震災で大きな被害を受けた。書籍『石巻赤十字病院の100日間』は、被災地の只中にありながら水没を免れ、被害を受けた医療機関に代わり石巻の医療のほとんどを担うこととなった病院の100日間の活動を克明に記録したものである。本稿では、そのなかの一節『大災害を乗り越えて』の内容を要約する。

石巻赤十字病院が通常の外来を開始したのは2013年の4月11日だった。それ以前にも、抗がん剤治療や循環器系疾患の患者を外来で受け入れてはいたが、一般の患者の外来診療が再開したのは、災害から32日が経ってからであった。患者も職員も、外来の再開を心待ちにしていたこともあり、病院のあちこちでは人々が再会を喜び合う光景をみることができた。災害でいつ命を落とすかわからない状況にあった患者が、自分のことを気遣い再会を喜んでくれたことを受け、報われた、救われた、と感じる医療者もあった。

一方、外来診療が再開した日も、未だにトリアージタグが赤の患者が30人、黒が1人、黄色と緑は合わせて72人も病院に居た。最終的に、黒トリアージが0人になるまで60日がかかり、トリアージに記録された延べ人数は緑5118人、黄6644人、赤1726人、黒220人であった。

震災からおおよそ3ヶ月が過ぎた7月8日、石巻圏の避難所は129ヶ所、避難者は未だ6336人を数えていた。退院支援を担った看護係長は、石巻赤十字病院から他院への転院を支援した患者について、爾後のことが気になるものの、後ろめたさからそれを尋ねることができないと語った。また、避難所で働いていた看護師長は、のちのためにも震災での体験を記録したいが、記憶を辿ると涙が溢れ、未だ書き進めることができないという。

緩和医療科外来には、定期的に40人の患者が通っていたが、震災により3人が死亡し、2人と連絡がとれなくなった。連絡のとれない患者に関しても、それぞれ被害の大きい地域から通ってきていた患者であったため、二人を知る医師は、助からなかったのかと落胆を隠せない。

ある医師は、災害当日に網膜剥離の手術をする予定であった患者を断ってしまい、患者の消息が気になって仕方がなかった。それから4月になって電話をしてみると、山形の病院で無事に手術をしたと報告を受け、安心したという。

また、他の施設や救護班の人に労いの言葉をかけられ、「家族にも言われたことがないことを言ってもらえた」と自分がやったことに自信が持てるようになった職員や、共に働いた同僚に「みんな傷ついたけど、がんばったよね」と声をかけられ全てが報われた気がしたという職員も居た。こうして他人からかけられた言葉のおかげで元気づけられた体験をした職員は少なくない。

職員だけではなく、職員の家族、特に中学生や高校生の子供たちもボランティアに参加し仕事を手伝った。我が子の働く姿に驚いた職員も居たが、父や母の頑張りに目を見張った子供も多いはずだ。

千年に一度とも言われる今回の大災害で、日常はあまりにも簡単に破壊され、かけがえのないものが一瞬にして消えてしまった。石巻の人々は、この経験を容易に忘れることはできないだろう。しかしながら、人々は顔を上げ、先を見据えて歩き出した。石巻赤十字病院の災害救護係長はこう言った。「3月11日以前に戻れといわれても、戻ることは決してできない。だとしたら、この災害のもたらしたものと、それに人々がどう立ち向かったか、後世に伝えていくしかない」。